



呉巡検調査を振り返って その七

真下, 裕之

(Citation)

海港都市研究, 18:92-93

(Issue Date)

2023-03-27

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/0100482812>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482812>



呉巡検調査を振り返って その七

真下裕之

呉を訪れたのは二度目だが、軍港都市の調査という意識をもって訪れた今回、この町の個性をあらためて観察することができた。呉は、旧帝国海軍の四軍港（横須賀、舞鶴、呉、佐世保）のひとつではあるが、事実上明治以降に生まれた新しい港という点では舞鶴、佐世保と異なるし、港の開設がもっぱら帝国海軍の主導によっていた点では横須賀とも来歴を異にする。またこの軍港に戦後、英連邦占領軍が駐留したことは、今回の調査を通じて初めて知ったし、その多くを英領インド軍、オーストラリア軍が占めていたことにも注意を向けさせられた。この駐留軍は1956年に撤退したので、米軍がなお留まっている横須賀や佐世保とは異なる軌道を呉はたどったことになるし、両市が今日、独特の異国（米国）情緒を備えているのとは違って、呉の場合、繁華街の愛称が「れんがどおり」となっているように、その自意識は旧軍時代の記憶に結びつけられているようだ。

筆者の専門分野は近代以前のインド史であり、インド洋海域の海上交通や港町についてもいささかの関心を持っている。そうした点から眺めると、呉はインド史上の港町とはまるで違うものに見える。今日インド海軍が司令部を置くムンバイ、コーチン、ヴィシヤーカパトナムはいずれも、インド洋海域における海上交通の拠点として長い歴史を持った港町である。とくにムンバイはインド第一の商業都市であり、その港は軍港というより、インド洋を行き交う人やモノの結節点たる貿易港として長い歴史を刻んできた。英国インド海軍に源流を持つインド海軍のドックヤードは、この過密な商都の繁華な一角に門を構えているし、この港が近世以来、軍用艦艇の造船においてインド洋海域を代表する場所であることは今なお変わらないのだが、それでもこの巨大な商都において、海軍の存在感はさほどでない。インド洋をめぐる人とモノの往来の歴史が生みだしたムンバイという海港都市は、海軍があらたに計画的に作り出した呉と、様相をかなり異にするということだろう。このように比べてみると、明治時代に誕生した軍港都市・呉は、近代史の作用をとりわけ強くまとった特別な港町だといえるのではないか、との着想をあらためて強くした。

軍港都市は必ずしも戦いの町ではない（残念ながら呉は大戦末期に航空兵力との戦場になったが）。海上兵力を運用する海軍、同兵力を建造する工場、これらに属する人々・支える人々が独特の組織と気風が軍港都市の歴史を紡ぎ出してきた。誤解を恐れずにいえば、

そうした意味において軍事は文化である。近代のジオラマのような軍港都市・呉が経験した歴史は、一種独特の文化史であるとも言える。歴史学だけでなく文学や社会学、地理学など、複合的な観点から行われる海港都市研究にとって、呉のそうした近代史はかなり有望な研究対象ではないかと、調査を通じて強く感じた次第である。